
荷馬車の中で・・・

麻香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荷馬車の中で・・・

【Nコード】

N9209W

【作者名】

麻香

【あらすじ】

むかしむかし、それはまだ人間が売られる時代
何処かおかしい子供達がいきました
頭の良い彼らは思いました
自分たちの世界を作り上げようと。

そして、子供達は復讐劇を繰り広げる・・・

始まりの籠（前書き）

この物語はフィクションです実在する人物、団体、歴史等一切関係ありません。

少々血の気が多い作品となっていますので、苦手な方はタイトルにある「*」マークの話は避けて頂けると幸いです。

始まりの籠

? - - - 「こんにちはお久しぶりです製造者方」
おとうさま

? - - - 「また、お世話になります養育者方」
おかあさま

子供の無垢な微笑みに恐怖で顔をゆがめます彼らは思った

“ 死にたくない ”

クスクスと笑う子供達は鉄の檻の中で話し出す

? 3 4 6 「こんな日常つまらないなあ」

? 0 0 8 「だったら僕たちで変えてしまおう」

? 0 9 1 「それが良いわ、簡単な事よ」

? 2 5 7 「さあ行こうよ、僕たちの世界を作るために」

? 0 0 8 「フッフ、楽しみだね」

? 0 9 1 「そう、楽しみだわ」

? 2 5 7 「ハハハッ、こんなにワクワクするのは初めてだよ」

? 3 4 6 「さて、最初は誰から？」

断末魔に合わせて笑顔で唄う子供達

紅のステージで一緒に踊っているのは誰? . . .

むかしむかし、それはまだ人間が売られる時代

何処どこかおかしい子供達がいきました

純粹なのに . . .

無垢なのに・・・

それは、あつたかも知れない物語
だけど、すぐに消えていった物語

始まりの籠（後書き）

こんにちは、麻香です

第二作「荷馬車の中で・・・」いかがでしたか？

処女作とは少し変わって中世的な感じになると思われます。

初めて同時進行で書くこうと思っているので、次話は多少遅れ気味になります、

頑張りますのでよろしく願います！

感想、意見等在りましたら書いて頂けると嬉しいです。

？ 企みの舞台

彼は馬車に揺られていた

真夜中、荷馬車が運んでいるのは食物でもなく骨董品でもない。
やけに大きな荷台には鎖の音がかすかに聞こえるだけ…。

若い娘や幼い少年、誰もが俯きしやべらない

沈黙と闇だけが支配している空間で独りだけ明るい表情をした少年
が一人

明るい、と言うより無垢な笑みを浮かべた彼の瞳は碧く髪は金髪、
いかにも育ちの良い綺麗な顔立ちである。歳は10か13の間だろ
う。

しかし、場所が場所である、こんな状況下で笑顔でいる子など異常
でしかない

果たして彼は何故ここにいる？

「はい！次の品は今回の目玉商品です！」

沸き上がるのは変な格好をした大人達の歓声だった。

「なだらかな金髪に見事なライトブルーの瞳、オマケに容姿ときた
ら文句なし！コレほど上等な品は滅多に出回りません！」

饒舌に隣で語る男も変な格好だ。皆スーツに仮面！？（こいつら馬
鹿じゃないのか？）

鎖につながれた少年は、わざと客席にいる大人達に笑顔を振りまく。

オォー、とざわつく大人を見るとよけい馬鹿らしくなってきた
(さて、今回はいくらかな)

持ち主が決まったところで業者だったらまた同じ、彼は何回も似たようなステージの上でスポットライトを浴びていた。そろそろ持ち主はいないのか、と呆れかえっている彼は、この自分がいつたいどの位高値で取引されるかが唯一の楽しみだったのだ。

「……では30万から!!」

威勢良く言う男の声を引き金にあちこちから声が舞う

「40万!」「60万!!」

70、74、90、130

(今回は結構高値だ)

客達は皆声を張り上げ値段を上げていく…。

140、141、144

(そろそろ細くなってきたな)

暗闇の客席の中から意地になって数字を言う奴らの中で、驚くほど落ち着いた声が響く。

「500」

一気に静かになる客席、そりゃそうだ豪邸一軒建てられる値だもんな。

「500万!他にはいませんか?」

煽るように言う男に釣られて狂った鳥のような声が会場に響く

「550万!!」「600」

「600!他には無いですか?」

「……………」

「では600万。250番のお客様お買いあげです!!」

男は嬉しそうに幕を下ろすように命じる

「コレにて閉幕！今後ともこの。。。商会よろしくお願いいたします」

深々と礼をする姿はいつ見ても奴隷のそれと似ているような気がしていた。

「本日はありがとうございました」

道化師ヒエロの様な笑顔は仮面に隠され客席には見えないだろうが吐き気がするほど欲がにじんでいた。

「行くぞ」

落ち着いた声で言う強面の男は引き渡しのできで場所が短くそう言ったただけだった。

（こいつは商人か？情報が少なすぎる！！）

焦った少年は天使の様な笑顔で一礼した

「始めまして、今から僕は貴方のモノです」

そう言う男は不機嫌な顔をし、抑揚のない声で喋り出す

「お前は、私のモノではなく、今から私の主あるじのモノになるのだ」

自分の背の二倍はあろう強面の男を見上げ、作り物の哀しそうな顔で呟く

「…と言いますと、僕の主は誰なのですか？」

ため息混じりに男は話し始める。落ち着きのある優しい声で…

「セイレーヌ家の養子となるのだよ、全く、変わったことをする人だ」

今まで乗った事のない豪勢な馬車に乗せられ彼は思う。

（養子かぁ、めんどくさいな）

いったい自分に一番の高値をつけた主は誰なのだろうか？

宵闇に染まる外を見つめながら彼は馬車に揺られていた。

？ 日常は唐突に

少しの間寝ていたらしい、気が付くと目の前には大きな屋敷が見えていた。

「あれが、これからお前の住む場所となるんだ」

馬車を降りると老人が顔を出す、いかにも時間と金をもてあそんでいそうな奴だ。

「おお、来たか。お前を歓迎するよ、名を何という」

「僕に名前はありますか、出来るのであれば僕に名前を頂けますか？」

「そうかそうか、礼儀正しいお前には×××と名付けよう」

「嬉しいです、有り難うございます」

上っ面だけの笑顔は得意だ。気に入られる為なら嘘なんていくらでもつける。

「うむ、ヨロシク頼むぞ」

優しさに満ちあふれた老人の笑顔、明るい思い出の一つ

それから“養子”としての生活が始まった。セイレー又家は鉄工業を営む大富豪らしい、当主の爺さんと息子夫婦と孫の一人娘、それと、使用人しか住んでなかった。

爺さんの妻はとうに他界したらしい。

孫娘は9歳でこいつの面倒を見るのが養子としての俺の仕事となった……

「ねーねー×××兄様にいさまこれは何？」

無邪気に聞いてくる孫娘は端から見れば可愛いだろっ、整った顔を

していた。

「ああ、ソレは鬼ですよ。…東洋のおとぎ話ですか？」

「ええそうなの、いつも倒されてばかり……かわいそうだわ」

「お嬢様は優しい心をお持ちですね」

「何故。鬼はこんな目に遭わなければいけないのかしら」

「……だから」

「えっ、何？聞こえなかったわ」

「それは、鬼は人間にとって害を及ぼすモノとされているからですよ」

「害？」

「はいそうです、まあ本当のところ、どちらが害を及ぼしているかは、その人それぞれの見解によるものでしか無いのですが……」

「むー……分かんない！難しい！」

「ハハッ、そうですね。沢山の方面から物事を見定めるのは重要な事です」

「本当に兄様は物知りね」「そんなことは無いです」

「あと、敬語止めたらどうかしら？使用人みたいでおかしいわ」「すいません、癖でして」

「ほら、また敬語」「直すように頑張りま…頑張るよ？」

「兄様にも得意でないことがあるのね、いつもは何でも出来てしまうのに」

広々とした屋敷内、木陰で楽しそうに笑う少女。自分はこのくらいの時、何を思っただけで過ごしていたら……

ある時は、セイレーヌ家が他の家に潰されかけて。こっそり爺さんに助言したこともあった。悩んだ顔も面白かったんだけど、先に崩

壊しては困るんだ。

（全くもって馬鹿な奴らだ、こんな事も分らないなんて。お嬢様の方がまだましだ）

そんなことを思っているのも知らずに爺さんは感心したらしく、それから何か困難に出くわすと俺に質問してくるようになっていた。それを好ましく思っ居ない連中も居たようだが、どうでも良い話だ。

事の発端はそれからしばらくしてからだった。

「父さんが、死んだ？」

俺の名付け親は他殺で殺された。まあ、それはどうでも良いことだ。問題は葬儀の時に爺さんの遺書だ。

“息子夫婦にはおよそ6割の財産。2割を孫娘が、使用人達に働きをたたえ1割”

“そして、養子である×××に残りの1割を”

“PS 当主になる人間を私が生前に宣言しなかった場合、×××に決めさせる権利を与える”

（おいおい、そこまで人任せかよっ！）

最初に俺の胸ぐらを掴んだのは爺さんの息子だった。そりやそうだと、こんな追伸無かったら当主になれるのはこいつなんだからな
「何故、養子の貴様ごときに選択権があるのだ！そんなの剥奪^{はくだつ}して

やる！」

「そうよ、いくらお父様だってこんな子を当主にするはず無いもの！」

ギヤーギヤーとほえる息子夫婦を横目に手紙を手に取り落ち着かせようと試みた、これが焼かれてしまつては困る。

「お義母様それは誤解です。ここに“決めさせる権利”と書いてあるではないですか、僕は決める立場にあるだけで当主になる立場ではありません」

「だから何だという！どうせこの家の財産を横取りする気なのだからっ！！」

「お義父様、落ち着かれてはいかがでしょうか。財産の配分はお爺さまが先にかかれておりますよ？あなた方は6割も持っているのにどうして声を荒げる必要があるのですか？」

？ 開始を告げる黒い封筒 *

彼の冷静な態度に息子夫婦は沈黙した。

しかし、二人はまだ腹立たしい様で義父は掌を強く握りながら彼を睨み付け、義母は部屋内をしきりなく歩き回りながら爪を噛んでいる。どうにか押さえようと必死になっている様子を見ながらも彼は無表情を保っていた。

耐えきれなくなつて、彼を他の部屋に移し、口を開いたのは義母の方が先だった。

「では、×××。お前はどのような方法で当主を決めるつもりですか？」

「僕の“決めさせる権利”を認めて下さったこと感謝致します」

義母が納得いかないような凄惨な形相でいても彼は平然と続けた

「僕の見解で一番このセイレーン家でふさわしいと思う方にその座を差し上げようと思つていますが、今のところ確信できる方が見つかりません」

「なら、早く決めておしまいっ！只の貧民育ちがっ！」

胸ぐらを掴んで怒鳴る彼女に武芸が仕込まれていたなら俺を殴つていただろう。だが、調べは付いている、こいつには武力と言う切り札を持ち合わせていない。それが分かっているから好きなだけ挑発できるんだ。火種となるように……

「そう急かされては誤った判断をしてしまいます。今しばらく時間を下さい。あと、もう一つ、お義母さまに言いたいことが御座います、よろしいですか？」

すると義母は、鼻を鳴らし眉を寄せ、少し間をおいて喋り始める。

「……………その、母親みたいな呼び方を止めれば考えなくもありません」

「では、奥様申し上げます。“僕は貧民育ちではありません”どちらかというと設備の悪い温室育ちです。はき違えないようにして頂きたい」

言い逃げと言ってそのままだろう俺は部屋をでて爺さんの書斎へ向かった。

（さてと、そろそろだ。俺はどうしようか）

その日の夜、屋敷内各一人ずつ黒い封筒の手紙が渡った。

“全員に権利がある。そして、選ばれる確率を高めるのも自由”

“ただし、期限は一週間。一番ふさわしい者が当主となるのは変わらない”

騒ぎが起きたのは2日後の朝だった。

部屋を開けると腐敗臭が漂う、絨毯は紅く染められ、指と思われるカタマリが転がっていた。切り口は千切ったようになっていて、どの指が見当が付かない。

それは普通なら当主になるべき人物、義父が口から泡をはき、右手左足をあり得ない角度に曲げられていたのだ。

一番最初に発見したのは妻である義母。すぐさま、使用人を呼びつけてこういった。

「あなた達！？いったい何をしたのっ！」

「……そつ、そんな私達は何も
……何故です！奥様

知りもしない事で疑いをかけられて動揺する使用人達を割って少年
が顔を出した。

「それは、こんな力業を奥様やお嬢様が出来るはず無い、それに何
か毒を盛られたのでは。と、奥様はおっしゃりたいのでは」

「そうよっ！一番当主の可能性が高い、この人を誰かがっ…………こ
んなむごい殺し方をして、自分が当主になろうとしたんだわっ！」
大声で泣きじゃくる義母の姿を見て使用人達がざわつきだす。

「そうですね、これで全員の確率が少々上がったことになります。
もちろん奥様も、ですが……」

「…………あと5日と15時間ほどですね」

彼は見逃さなかった、顔を覆い泣きながら口元からこぼれている歪
んだ笑いを。

残っているのは二十人の使用人と義母と妹（仮）と俺。真っ先に殺
されると思っていたが違ったようだ。まあ、動機は何となく解るけ
どさ。

面倒になると嫌なのですぐに立ち去ろうと彼は思っていた。

「それでは、僕はこれにて……」

「……待ちなさい、一つ聞いても良いかしら？」

さつきとは違う冷静さ、別人みたいな変わりように、誰もが息をの
んだ。

「何でしょう、奥様」

社交的な笑顔で迎える養子に対して、義母は冷たく暗い眼差しを向
けて呟く。

「貴方、当主になるつもりは？」

「御座いません。僕はその資格は自分にないと確信しております」

「では、ゲーム盤の上には居ない存在として扱って良いのかしら？」
「構いません、僕は只の監督者です。誰が何をしようと“個人のルール”に背いていなければ良いのです」

「個人のルール……なるほどね、ククッ」使用人達は彼女の不気味な笑い声に恐怖する。

「ごめんなさい、取り乱してしまつて。あなた達がそんなことするはず無いわ、この部屋は警察が来るまでこの状態にしておきましょう」彼女はいつもの優しい顔でそう告げた。

警察なんて来ない、使用人達はそう確信していた。セイレー又家は今、裏業界でも成功している。通報してしまえば自分の首を絞めることになる皆が理解していた。

早い話、主が死んだこの家の中は無法地帯となつているのだ。

「なら、逃げ出してしまえばいい」「馬鹿ね、そっちの方が大変なのよ？」

「お嬢様、使用人室^{こんな所}には来てはいけません。奥様にしかられますよ」

「良いのかしら、それで」
「？」

「ああなつてしまふのに、逃げ出す気？」

彼女の指さす小さな窓の外に見えたのは片腕、切り口からは赤黒い雫がばたばたと垂れる。のぞいてみると、紅の道は続いている……ぐしゃり、何か潰れる音が聞こえたきがした。

？ 壊れた者は何を思う *

只、静かに消えてゆく灯火^{ともしび}。悲鳴は彼らの耳に届きはしない。

只、本能は訴えかける

『コロセ、コロセ、イキルタメニ』

クスクス、誰かの押さえた笑いが聞こえる。両手を真つ赤に染めて、せつかく洗濯したばかりの服を汚して。あーあ、また叱られてしまふな、どうしよう……

十

3日目、死者は合計3人となった。二人とも使用人で一人は片腕を引き千切り大量に出血して、もう一人は顔面を掻き回された状態で発見された。

何となく感じていたのか、誰にも驚いた様子はみられない。

すでに、皆誰かを疑おうなどという考えは捨てていた。時間が、余裕が無い。

そんなことをしていたら、今度は自分が殺されてしまうのだ。

4日目、今度は一日で4人も人間が斬殺された。鋭利な刃物で大きく裂かれていて、今までとは少し違った殺害方法だ。未だ現場を見た物はまだ誰もいない。

……というか、見たならその時点で殺されて居るだろう。使用人は怯えて仕事も手に着かない。

……もしかしたら、隣にいるのは犯人かも知れない

屋敷内のとある一室で、傍観者は手元にあつたチェスの駒をいじりながらほおづえをつく。

「みんな、忘れてるよ？馬鹿だなホント、恐怖は冷静な判断が付かなくなる予鈴なのに」

少年はクスクスと笑いながらそう呟いた。彼は死体を見ても何も感じない、むしろ面白がつていた。少年は思う、あんな脆いモノは飽きた。今度は人が壊れる所を観たい！

「……あと三日だったっけ、早いなあ。つまんないや」
年相応の好奇心あふれる声で言う彼は冷ややかな笑いと軽蔑の眼差しを屋敷中に向けていた。

5日目、2人が首をつり4人が屋上から飛び降り死亡。これで13人殺された事になる。

義父と使用人が殺され、残るは七人の使用人と義母、妹、俺の10人だ。

義母は自分の部屋と義父の部屋を行き来して居るだけで、ほとんど食事にも手を付けない。

三日も放置された義父の遺体は八工がたかり、膿うみがわいていた。

「ああ、貴方はいつも素敵だね。待っていてね、あと少し……あと少しだから」

陶醉したように死体の横で話す義母は焦点が合っていない。

髪は血で染まりガザガザに、腕や足には引つ掻いたような痕がある。やつれた顔には一睡もしていないのか隈が出来ていた。彼女は夫の胸に指をつきたて、肉をえぐり出す。

その異様な風景は異常なこの屋敷だからこそなのか、不思議と変ではない。

彼女に話しかけても、時折不気味に笑うだけで、応答が帰って来ることは永遠に無かった。

翌日、義母は死んでいた。胸にざっくりと刃物が刺さり、義父の上にもたれ掛かる様な姿勢で見つかったので、自殺の可能性も低くはない。あの状態だったらやりかねない。

今更、一人死体が増えたことはどうでも良いことだったが、彼らにとっては衝撃的だったらしい。使用人は皆あ然とする。

誰もが疑っていた人物が、ここに来て消えたことにより、皆の糸がぷつぷつと切断された。

人が人で無くなる瞬間、理性と共にはじけ飛んだのは肉片だけだ。

傍観者はその姿をあざ笑い続ける。

「ハハッ、これだよ、俺が観た^{オモチャ}かったのはっ！」

自分の思い道理のままに動く人間^{オモチャ}をみて楽しむ少年、

「コレで、一つ復讐^{仕返し}ができた。思い知れ、全てお前達が悪いのさ！
！」

残りの使用人は皆、顔を合わせると同時にきざみ始めて最後には誰一人生き残らなかった。

目の前で血飛沫をあげ倒れていく人間をみながら、平然と廊下を歩く少女がいた。

腐った血肉の臭いが充満し、美しかったはずの屋敷内はみる影もない。

そんな中でもお気に入りの歌を口ずさみながら、まだ真新しく生温かい死体をまたいでいく。

彼は、予想していなかった出来事に好奇心と不愉快の両方の感情を抱いていた。

現実が空想になってしまっているかのように、あるいは理想が義妹の現実となっているのかもしれない。ただ、抜け殻のようになった彼女のその足取りは淡々としている。

それは、不運か？幸運か？

彼にとって、この清潔な場所は気持ちが悪い。

まるで、ここで起こっている事を隠すように嘘で塗り固めているようだ。

腐りきった世界に向けて、意地悪な神に向けて幼い少年は問う

『人間にとって人間は何？』

？ 願いと欲望は紙一重 大

彼女はこれまで部屋にこもりながら、耳をふさぎ、忘却の神にすがっていた。

それが彼女にとって良かったのかは解らないが、おかげで殺し合いから逃れられたのだ。

これは、悪い夢、転がっているのは人じゃない。違う違う違うでも

•
•
•
•
•
•

違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
ウ!!!!

もう、彼女は死体が視界に入っても、頭は認識しない。昔のままの屋敷であるだけ。

握っているのは護身用の銃だけど使い方なんて知らない。

みんな死んでいるのに何故か哀しくない。あれ？何でこうなったんだっけ……忘れてしまったわ

†

幼い少女の目に映るのは憶えている笑顔。

「おめでとう御座います、お嬢様、貴方が当主ですよ？」

金髪はサラサラしてて、眼は綺麗な碧色で、頭も良くて、何でも教えてくれる。

それに、私を無視したり殴つたりもしない。

「兄様、敬語は直らないのね」

「ご…めん？」

この困った顔が私の一番のお気に入りだ、ああ、変わっていない。

「誤る事なんて無いわ、癖はそう簡単には直らない物よ」
「……そうかも知れないな」

地獄の中でたった一つ手に入れた天国へ行ける道にすぎるように、
彼女は少年に抱きつく。

静かにあふれる涙は清らかすぎて、俺にとっては不愉快でしかない。
しかし、彼は小さく温かい義妹いもづこを突き放そうとはしなかった。

「みんな逝ってしまったのは何故？なんで」

「さあね、僕には理解出来ない。でも、何か原因があるから物事は
皆変わっていくのさ」

「じゃあ、ハジマリは何処？どこ」

「僕が来たときからかもしれないし、もっと前かもしれない」

「これからどうすれば良いのかな？」

「それは、君が決めるんだ……」

静かに眼で頷き義兄あにとして義妹いもづこに告げる

「……もう君の人生は君の財産だ、自分で選ばなきゃ駄目じゃないか。
人になんか渡しちゃ、きつと君が後悔するよ？」

「ねえ、三つお願い聞いてくれない？」

「俺に可能なことだったら、三つくらいどうって事無い」

「……あのね、兄様の本当の名前が知りたいの」

「俺の名前はレオンだけど……」

「それは、祖父様おじいちゃんが付けた名前じゃない」

「俺はそれしか、名前がないんだよ」「憶えてないの？」

「ああ、だからコレが俺の名前。獣の王者からとったらいいけど、
俺は嫌いじゃない」

「じゃあ、その名前大事にしてね、約束だよ?」

「……それが、二つめの願いか?」

「ちがうちがう、約束だってば。ずるいよレオンは」

「兄を呼び捨てとは良い度胸だな」

軽く微笑む少年をみて少女は無理に笑って見せた。

「二つめはね、誰が何人、何のためにどうやって殺したのかが聞きたい」

「そんなことに二つめを使っているのか」

少女が縦に首を振るのをみて、少年は本を読むときと同じように語りかける。

「まず、爺さんは息子…君の父親が金を積み雇った殺し屋に殺された。

次に、父親と三日目の死者は君の母親に。四日目は俺が四人殺した。

そして、五日目は皆自殺に見えるが、転落死した二人は他殺だ、

犯人は……」

「……私、六日目のお母様も私が殺した。自覚は無いんだけど、そんな気がする」

「そう、君は2人しかいない十代の使用人を突き落として自殺に見せかけ、母親は君に刺されて死んだ。というかアレは事故死だったんじゃないか?」

「わかんない。お父様の部屋が凄い臭いしてて、気になってあけてみたら。お母様がペーパーナイフ片手に飛びかかってきた」

「俺は、無意識に自殺に見せかけるよう動いたお前は頭が良いと思っただけだな」

「でも、いけない事じゃない?」うつむき辛そうに話す義妹

「俺もあの状態ならそうしてたし、この屋敷内で俺の推測道理に動

かなかったのはお前だけだった……」これは俺の本音でもあり、賞賛の言葉だ。

優しい声で話すその顔はどことなく悔しさがにじんでいた。

「兄様は殺した人だけしかわからないのかしら」

高く冷たい声が屋敷に響く、少年は驚き、そしてニヤリと好奇心旺盛な笑みを見せた。

「わかるさ、君より俺は馬鹿じゃない。顔をわからなくする細工は君が全部やったんだ。人の顔面が崩れていく様の感想はどうだったんだ？」

くすくす、と小さな笑い声が聞こえる、先刻の涙がまるで嘘のように彼女は横にいた死体の顔を踏みつぶした。プチプチと肉が潰れる音が聞こえる

「ええ、楽しかったわ。使用人^{こいつら}達みんな私を無視するんだもん腹が立ってしょうがなかった。あんな醜い顔で哀れみの視線を向けてくるなんて吐き気がするわ」

容赦なく踏みつけるその姿は別人格のようだ。

「そうか、一度は会いたかったんだよ君に。三つ目の願いは何だい？」

「お兄様。このきつたないお屋敷焼いてもらえるかしら？」

屈託のないほえみで彼女はそう告げた。

？ 意地悪な嘘は永久に

「嫌だ」

彼女はその言葉に驚いた。

今まで何でも言うことを聞いてきた彼が、私の世話役としてここに
来た彼が、私の言うことに背くなんてあり得ない…………

「何でっ！？…………解っているのかしら？私に背くということはこの
屋敷に居られなくなるのよ？」

掌をきつく握り、奥歯を噛みしめ怒りに震えながら彼女は嗤っ
ていた。

「だから？こんな屋敷、君はいらないんじゃないの？」

そんな姿を見ながら彼は満面の笑みで答える。その、意地悪な微笑
みは義妹を落胆させた。

「でもっ！私がセイレーヌ家の当主なのは変わりないわ！！」

「確かにそうだけど、焼いて欲しいんでしょココ」

「それはっ……………！」

義妹は詰まり何も言い返せない、思いつかない。言葉は重い物だと
彼女は今知った。

でも、焼いて欲しいのは**ほんとう**の願いだ。

混乱の中うめく彼女をまっすぐと見つめ少年は追い打ちをかける。

「それは？」

ニヤリと笑う彼の姿はどこまでも意地悪だった。

十

“屋敷を焼いて欲しい” 何でそんなこと思っただっけ？

そう、昔から言われ続けた。

「お前は何て愚かな子供なのかしら、こんな子私は知らないわ」

母は本当に私を忘れ、無き者とした。簡単な話、邪魔だったのだからと今は思う。

母は父に愛を求め、父はそれが異常な物と気付きながら見て見ぬふりをし続けた。

この頃の母はたぶん独占欲が強いだけ………だったはずだ。

周りはおしどり夫婦と呼ばれるものの子供はいないと思いこまされ、セイレーン又家の中でしか存在しない物が私なのだ。いわば、『籠の鳥』

一番最初に捨てたのは母でそれを隠したのが父、そしてそれを見かねて保護したのがお祖父様。

そんなこんなで母親からは虐待され続ける以外、両親は私に対して無関心だった。

私は何処にいても一人孤独、そんなときお祖父様が連れてきたのがレオン兄様だ。

初めて自分に關心を持ってもらえて嬉しかった。表面だけ何でも言うことを聞いてくれるだけの使用人達とは全く違う。

「お嬢様は本当に頭が良いお方だ」

そう笑顔で頭をなでてくれるその手が温かくて、輝いていて………彼に褒めて貰う為だけに必死になっているいろいろな事を憶えた。

それも、お祖父様が死ぬまでの話だったけど………

その後に気付いたのは母が父へ向ける歪んだ愛情。たぶん私が居なかったら父は死ぬ前にああされていた事だろう。

（感謝と謝罪を要求したいわね）

チャンスだと思ったのは父が死んですぐ、お祖父様が私の為に両親が奪った物“セイレ・ヌ家”を取り返すようにこんなルールを作ったのだと。

こんな時にばかり頭の良さが発揮される……他の可能性を無視して自分の思いこみを肯定した。

だから、母親を殺すのも若い使用人を突き落とすのも、何のためらいもなく行動したのだ。

楽しいとさえ思いだす自分に驚いた。血を見ても肉片を見てもそれ程苦ではなく、慣れていく度に欲求は、エスカレートしていく……

……
我に返ったとき血飛沫と腐敗臭に埋もれた屋敷を見て彼女は思ったのだ

レオン兄様が一緒ならこんなお屋敷いらないんじゃないかしら？

十

混乱したときは、発想の転換、視点を变えて状況を整理する。

泣きじやくりながらも10歳になっていた少女は脳を働かせ続けた。
（兄様に反抗するために兄様が教えてくれた事を使うなんて、負けも同然ね、私）

しばらくの間、義妹は泣き叫び続ける。突如彼女が泣きやんだ瞬間、静寂が訪れた。

そして、クスクス、と気の抜けた笑いをもらすと彼女は最愛の義兄の目をまつすぐ見返す。

「貴方は何で屋敷を焼かれないのかしら」

驚き、困った顔をする彼はため息をつきながら話し始める。

「全く……俺は初歩的なミスをしたな、どうやら君に教えすぎた

らしい」

「話をそらさないでもらえるかしら？」

自信のありそうな顔は泣きすぎて目が腫れて真っ赤なのに不意に可愛いと思ってしまう。

「分かったよ、我が儘な義妹様いもつとだな」

俺が頭をなでながらそう言うとな彼女は満足そうに微笑んだ。

「まず、俺の目的はこの世の中に少しでも俺達の存在を公表すること」

「俺達？貴方だけじゃないの？」

「……………関係のない話だ、重要なのはそこじゃないだろ？」

義妹の視点は間違っていないかった。だが、俺にとって気付かれるのは邪魔になるだけだ。

内心焦りながら、嘘をつき慣れた俺は彼女に甘い微笑みと声で誤魔化した。

こいつが俺の事を好きなのは知っている、俺はそんな感情は忘れたが、偽りの物なら何だって創り出せる。

“それが俺の目的の為の手段ならば”

「俺としてはこんな事になったのは誰の所為か、なんて人間が仮定する所を観てみたいんだよ。燃やしてしまっただけはもともとも無いだろ」

「それで、どこかの企業に疑いをかけて倒産させる気なのかしら」

「大体あつてる、そんなところさ」

軽く義妹の前髪をすきながら、彼女の様子を伺って見る。

彼女は完全に安心しきり、得意げに笑っている。いつもと変わらない彼女だ。

「だから、この家は燃やさない。君の願いは二つまでしか叶えられ

ない」

――グサツ

聞き慣れた音が彼女の耳に届く。

何かが自分から流れ出る感覚と共に気怠さが襲い、足に力が入らず兄にもたれ掛かる。

刹那、鈍痛が全身を駆けぬけ、口からはき出した液体は紅く染まっていた。

（私、死ぬの？マダ、シニタクナイ）

彼女は兄の耳元でかすかに語りかける、すると彼は困った様な顔をして何も言わなかった。

今にも泣きそうな笑顔は儚く、彼女は精一杯の力を振り絞り言葉を紡ぐ……

「最後のわがま……まっくらい、きいっ………てくれないっ…のね………意地悪」

それが彼女の最後の言葉だった。

義兄は義妹を作り物の明るい笑顔でみとり、声もなく口だけで喋る。

“さようなら”

彼は妹の薄い唇に自身の唇を重ねても彼女はもう動くこともない。俺はこいつにとって意地悪のままだ……。まだ、かすかに暖かい妹をきつく抱きしめる。

“ごめんなさい”

すると、彼の瞳から雫が流れ落ちる。初めての事だった、いつも嘘泣きはできたのに……自分が感情に流されるなんて今まで無かったのだ。

今自然にほころんだ顔は本物の笑顔だと静かに泣きながら俺は気付いた。

それが、彼の最初で最後かも知れない偽りでは無いモノ

十

後日、セイレーヌ家の怪死事件は発見された。容疑者も見つからずに謎のまま終わったこの事件は家庭内でのトラブルが原因と言うことで警察は決着を付けたらしい。

しかし、その後も一時的に急成長を遂げた家の屋敷の者が皆殺しにされる事件が相次いで発生している様だ……

金髪碧眼の少年はその後××××××××××……

？ 意地悪な嘘は永久に（後書き）

これにて『第一章 閉幕』です。いかがでしたか？

章ごとに話と主人公（子供達）を変えて行きたいと思っていますので、

これから『荷馬車の中で・・・』をよろしくお願いします！

？ 絶対王政

とある国の中央広間、ここは国の重大発表に使われる場所だ。今日もアストラル王は無理難題を民に投げかける。

「戦争を隣国と始める！」

思いつきは暇だったから、誰も逆らう事無く賛同するだろう。王に逆らったら即“処刑”、良くある話だ。嫌でも皆、何も言えない。

そんな中、一人の少年が王の前まで顔を出した。

「王様、負けるのに戦争するって馬鹿じゃない？」

気味悪く笑う少年は13〜15歳ほど、適当にショートにされた銀髪に濁った紺色の瞳、あどけなさが残る顔に鋭い目つきが不釣り合いだ。

「無礼な、わしが負けるわけ無かろう」

「本当かな？証明してよ」

なめた態度を取る少年に王は腹を立てて、強い口調で言い返す。

「小生意気な小僧、お前に戦の何が分かる！！」

「分かるよ、戦争。日常茶飯事でしょ？」

少年の言っている事は訳が分からない。只、そのニヤリと馬鹿にした笑みが王を挑発してくる。

「ええい！！誰かそのものをとらえろっ！さらし首にしてくれるっ！」

刹那、周りにいた数人の兵が少年をとらえようと突進してきた。それを少年は、身軽に飛びながらかわし、無邪気に笑って見せた。

「嫌だなあ物騒じゃん、カルシウム取ってる？」

軽快なステップで踊りかわし続ける彼は淡々と話す。どんな国内一の騎士だろうと全く齒が立たない。下々の者の苦戦も無視して、王は怒りではなく疑問で顔をしかめた。

「カルシ……なんだ？それは」

「うーん、牛乳に沢山有るんだけどね」

まあいつか、などと呟き彼が地団駄を踏む、その地点から空気は振動し兵を押しつけた。

彼としては軽く、皆には重く感じたその訳のわからない打撃に兵は恐れおののく。

王はそれでも物怖じ一つする気配がない。それを見て不満に思ったのか唐突に彼は話しかける。

「ねえ、おじさん」

「おっ……おじさん？だと!？」

初めてうるたえた王を見て、彼は面白そうに笑い、追い打ちをかけるように言い放つ。

「だって、僕この国の人じゃないもん、僕から見れば只のおじさん」
怒りに震える王は周囲に大声で命令するが、兵は動こうとしない。
みんな怯えて、立てない状態になっていたのだ。そんな姿を眺め再び微笑む。

「それでさ、提案。僕がおじさんと戦争して勝ったら本当、負けたら嘘だったってどう」

「兵も民も居ない小僧にわしが負けるわけなからう、可哀想なくらい頭がイカレてるな小僧」

ゲラゲラと笑う王は自分が『おじさん』などと呼ばれ続けていることには気付いていない様子だ。（馬鹿なのはそっちじゃないか）と彼は心で呟く。

「じゃあ、その可哀想さに免じて一つ賭をしない？」 「何だ？」

興味深そうに身を乗り出す王は先程のように怒ってはいない。いちいち腹を立てるのは無駄だと判断したのだろう。聴く体制になった王を見て、少年はいっそう瞳を輝かせ明るい声で一番の微笑みを垣間見せながら声を張り上げる。

「僕が勝つたらこの国ちようだい、民も兵も土地もぜーんぶ。ああ、おじさんはいらない」

……一時の沈黙

それを破ったのは王の高らかな笑い声だった。愉快、愉快、と言いながら少年を真つ直ぐ見下す。

「ここまで来ると面白い、良かろう。ただし、わしが勝つたらお前は処刑だ」

“処刑”と言う単語を聴いていないのか聴いたのか、少年は先刻とはうって変わって、冷静な顔で王に問う。

「良いよ。じゃあ、いつまでにする？僕のオススメは一ヶ月だけど」「ではそうしよう、そもそもお前など三日で倒せるがな。土地はどうする？分けてやろうか」

得意そうに意地汚く王は笑い、彼に問う。

「ううん、僕が立っているところが僕の土地だから」

眼光の鋭さを増しながら彼は呟く。それを聞いて王はしかめっ面で髭をさすった。

「それではわしが、攻めようがないだろう」

「ああ、おじさんの戦争って土地の略奪？だったら半分にしたら公平じゃない？」

「では小僧に西半分をくれてやる、せいぜいわしを楽しませてくれ

よ」

ゲラゲラとまた笑いながら王は言う。民衆のことなどお構いなしに自国の土地を分けるなどと言い出した王に人々は内心呆れ果てていた。

「こつちこそ、アストラルおじさん」

「そうだ。小僧、名は？」「えつと……あつ、ルシオラ」

明らかに偽名の臭いがする受け答え方をする少年を見て、西半分の民衆は不服そうに睨む。

王の我が儘によりこの日から一ヶ月間^{ゲーム}国の内戦が決定したのである。

十

国の西側の中央部で民衆の話し合いが行われていた。

晴れて王の束縛から逃れ自由の身となったのだが、何処の骨かもわからない少年の言うことを聞いて良いものか。と、議論しているのだ。

「俺は、聞いてやる。仮にも解放してくれた奴だ、恩返しするのが義理じゃないか？」

「だが、あれはどうみても子供だぞ！命を預けるにとしては信憑性に欠ける」

話は平行線をたどり続ける。そこから生まれる陰険な空気は、少年の元まで届いていた。

顔を上げれば夕日が沈んだ後の紫と青のグラデーションが覆い被さる。一つため息をつく少年は立ち上がり、喧騒の最奥へと足を運びはじめた。

？ 囁き 蠢き ？が吹く

西側にある一件の民家。そこには母親と私が二人で住んでいる。父親は王に逆らい、私が小さい頃に処刑されてしまった。

でも、この家は今、王に逆らった少年の仮の住まいでもあるわけ。あの歴史的な日の夜、彼を匿^{かくま}う様な人は母親以外誰もいなかった。彼女は私が呆れるほどお人好しで、それが私の親自慢な所でもある。最近の趣味はその少年……ルシオラだっけ、彼の特殊な能力について個人的に調査中。

たとえば、今日の朝の話。ご飯食べてる最中に……

「馬が十頭、南東から1？先に走ってきてる」

何て、いきなり呟くの。1？先なんて人間に聞こえると思う？

「わかるの？」

「まあ、それ位はできる」

礼儀正しい良い子なんだけど、ちょっと変わってるの、無愛想だし、時々おっかない顔するのよ。近所の子も私を心配して声かけてくれるんだけど二の句には彼の話ばかり聞いてくるから結構大変。

でも、周りのみんなも悪くは思っていないみたい。やっぱり一番最初の夜の時、王が使わした小隊を一人でいとも簡単にたおしたのがある程度信頼を得ているのかしら。

それから、彼は今までの攻撃を一人でかたづけてるらしいわ。

あと、ご飯の時以外は家にいることないし……まだ謎が多すぎる。夜はあんまり寝ていないみたいだし、何やってるんだろう？

とある田舎の教会の一室、そこにいたのは身なりのしつかりした人達ばかりだ。

彼らはなるべく質素にしているつもりだが、身につけている高級時計などに裕福な育ちであることがにじみ出てしまっている。

太陽の光が降りそそぐ部屋で4〜6人が長い机をはさんで会話を交わしていた。

今、女性がルシオラの横で資料を読み上げている最中だ。

「……どうでしょう、詳細は以下の通りです」

「勝機はあるのかね？今の内容では完全に西の方が不安定に見えるのだが」

「えー安心してよ、僕は負けたことないから」

ルシオラの憂鬱そうな眼は彼の首を縦にしか振らせない。

「みんな見てると思うけど、僕は数々の戦争を乗り越えてきた。だから僕は負けないことをあなた方に約束しよう。だから僕のために“力”をかして」

ただの無邪気な笑顔だけで大量の資産が降ってくる。（ああ、なんて面白いんだろ）

+

……タン……タン

リズム良く暗い廊下に響くのは軽い足音。静かなココには余計に響く。

目の前を通り過ぎてても、警備の人は何の反応も見せない。

彼はそれに気付いているのだろうか。否、^{いや}気付いてないだろ。

不意に誰かに触れてしまった。

「貴様……誰だ！？」

「あれ？見つかったやつた？」

相手の顔を見る前に気絶させる。上手く潜り込み、みぞおちに肘をたたきこむ。

背の小さな侵入者の綺麗な長髪が翻され、音もなく大柄な男は倒れた。

薄暗い部屋にろうそくが揺れる。

王は高級そうな椅子に座りほおづえをついて、不吉な笑みを浮かべている。

ろうそくの光は陰を濃く映し、その不気味さを増していた。

“戦争にいたるのは力。細かく言うなら金である”これは王の心得。彼の勝つための法則だ。

「あんな、小僧にはそれすらわからんだろ」

王は小賢しくも貴族民が多い東を自分の領土にした。

あと必要なのはなのは情報だけ……

相手の力量がわからなければ無駄に財力を消費する。

一個小隊が全滅、貧民も反抗の意志を見せ始めたらしい。

だが錆びた鉄は鋼民衆騎士に敵わない。

「容易い。勝利は見えているぞ」

ゲラゲラと笑う王の声は城中に響き渡っていた。

僕は殺人に対してどんな感情も浮かばない。だって、どうでも良いことだから。

僕が傷ついたとしても、本当に傷つくのは相手の方。だから、そんなこと気にしない。

結果は同じ。残るのは死体だけだ。

昔は『殺せ』といわれて殺してた。

只、ソレガ全テダッタ……

今は誰からも指図されない自由を手に入れた。

只、ソ

ウスルシカ無カッタ……

だけど殺人衝動は僕の中で蠢うごめいている。

嗚呼、

頭ノ奥カラ聞コエテ来ル

僕は命令されて殺していたものの、

ホラ、前ト変ワナライ

本当は楽しいと思っていたのだ。

僕にとって“殺し”は人も国も関係ない。それが何であろうと殺す。

『それが、お前の存在意義だ。故にお前はそれしかできない』

あざ笑う者は自由になってから僕の周りをつきまとう。

“

才前ハ一生変ワレナイ”

「ああ、うざい!!」

？ 囁き 書き ？が吹く（後書き）

カタカナは別にして読んで頂けると幸いです。

タイトルの「？」は「おおかぜのおこるさま」と読むのですが、
「おおかぜ」が吹く』となります。タイトルに振り仮名が付けられないので後書きに記載すること、ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9209w/>

荷馬車の中で・・・

2011年12月5日19時52分発行